学校、一時間目は　「古文」。
夕べ、宵から寝てしまい、予習していない。
それで、僕に口語訳の番が当たらないかと
ヒヤヒヤだった。

夕顔、源氏十七歳の夏。

しかし、無事に終わった。

「源氏は十七歳か、ませた奴だなあ。
　昔は、皆、十六で　大人なんだ。
　僕も今年、七月で、十六だ。」

二時間目は生物。
先生の言う事、ならびに、黒板に書く事は
すべて教科書に書いてある。
ノートも取らず、ただ　ひたすら熱心に、
三時間目の英語購文の単語を暗記していた。

久し振りに、中間体操は屋外。
思いっきり走った。
後で、ズボンのすそを見ると
黄土色の泥のはねがかかり、汚れている。

案の定、三時間目は　単語のテストだった。

授業終了後、食堂は満員で、食事を取るには
長い間　並んで　待たねばならない。
それで、食べず、僕は一時のバスに乗る。

20　僕の脳裏から離れない……………82

萩原良昭